

科 目 名		内 訳	開講時期	対象学年	単 位	時 間	担当教員
運動学Ⅱ		講義・演習	後期	PT1年	2単位	60時間	三和真人
教 育 目 標	【一般目標】 運動学は身体運動の仕組みに関する学問であり、理学療法士の理論的基盤をなす重要な基礎科目である。本講義では、1. 身体運動に関する基礎的知識、2. 運動学に必要な力学、3. 筋骨格系の構造・機能と関節運動との関係、4. 姿勢保持と歩行動作の特徴について理解することを目標とする。						
	【行動目標】 1. 筋骨格系の構造・機能・名称を説明することが出来る。 2. 基本肢位および正常歩行を観察し、記述することが出来る。 3. 図表から対象者の動作を推測出来る。						
成 績 評 価 方 法	【評価対象】 ・ 中間試験・後期定期試験(筆記) ・ 提出課題 【評価基準】 ・ 中間試験、提出課題、グループ発表と定期試験を総合的に評価する。						
回	内 容						担当者
1	オリエンテーション、力学の基礎・用語説明						三和真人
2	生体力学の基礎						
3	肩複合体の運動学①						
4	肩複合体の運動学②						
5	肘・前腕複合体の運動学①						
6	肘・前腕複合体の運動学②						
7	手関節・手指の運動学①						
8	手関節・手指の運動学②						
9	股関節の運動学①						
10	股関節の運動学②						
11	膝関節の運動学①						
12	膝関節の運動学②						
13	足関節の運動学①						
14	足関節の運動学②						
15	脊柱・体幹の運動学						
16	脊柱・体幹の運動学						
17	呼吸運動、顔面と頭部の運動学						
18	立位姿勢						
19	運動学実習②アライメント評価						
20	起立・着座動作						
21	運動学実習③立ち上がり動作						
22	正常歩行①歩行周期						
23	正常歩行②ロッカー機能について						
24	正常歩行③外的・内的モーメント						
25	正常歩行④異常歩行						
26	動作分析①						
27	動作分析②						
28	グループ発表						
29	バランス評価、階段昇降						
30	運動学習						
履修者へのコメント ※45時間以上の自己学習を要する。 ・運動学とは、身体運動に関する諸問題に関して解剖学・生理学・力学・心理学的観点から問題を究明していく学問です。運動学を理解するために、解剖学・生理学の知識は常に復習するように取り組んでください。なるべく多く演習を取り入れながら進めていきます。・授業の進行具合により、授業内容を変更する場合は事前にお知らせします。							
テキスト ・基礎運動学 第7版（医歯薬出版） ・筋骨格系のキネシオロジー 原著第3版（ELSEVIER）							
参考書 ・15レクチャーシリーズ理学療法学・作業療法学テキスト運動学/運動学実習 ※その他の参考資料は授業内で紹介します。							

科 目 名		内 訳	開講時期	対象学年	単 位	時 間	担当教員
理学療法評価学Ⅰ		講義	通年	PT1年	2単位	60時間	星野光宏
教 育 目 標	【一般目標】 理学療法評価を構成する代表的な検査・測定項目について、その目的・意義・内容・手技を理解し、対象者個々人が持つ障害を理解するために必要な知識の習得を目的とする。						
	【行動目標】 1. 理学療法における評価の位置づけを説明できる。 2. 理学療法評価を構成する代表的な検査・測定の目的と意義を説明することができる。 3. 検査・測定によって得られた情報がどのような意味を持つのか説明することができる。 4. 障害が出現するメカニズムについて説明できる。						
成 績 評 価 方 法	定期試験、実技試験、提出物で総合的に判定する。						
回	内 容						担当者
1	オリエンテーション/総論 1						星野光宏
2	総論 2						
3	総論 3						
4	総論 4						
5	バイタルサイン 1						
6	バイタルサイン 2						
7	バイタルサイン 3						
8	バイタルサイン 4						
9	バイタルサイン 5						
10	形態測定/四肢長周径 1						
11	形態測定/四肢長周径 2						
12	形態測定/四肢長周径 3						
13	形態測定/四肢長周径 4						
14	形態測定/四肢長周径 5						
15	形態測定/四肢長周径 6						
16	まとめ						
17	関節可動域測定 総論 1						
18	関節可動域測定 総論 2						
19	関節可動域測定 総論 3						
20	関節可動域測定 総論 4						
21	関節可動域測定 上肢 1						
22	関節可動域測定 上肢 2						
23	関節可動域測定 上肢 3						
24	関節可動域測定 上肢 4						
25	関節可動域測定 下肢 1						
26	関節可動域測定 下肢 2						
27	関節可動域測定 下肢 3						
28	関節可動域測定 下肢 4						
29	関節可動域測定 頸部・体幹 1						
30	関節可動域測定 頸部・体幹 2						
履修者へのコメント ※45時間以上の自己学習を要する。 ・評価学の習得には疾病、解剖学、生理学、運動学の知識が必須であるため、復習を怠らないこと。 ・理学療法士にとって最も基本的で実施頻度の高いものとなるため、授業外でも修練に励むこと。							
テキスト ・理学療法評価学 改訂第6版補訂版（金原出版）							
参考書 ・理学療法ハンドブック 改訂第3版 第1巻 ・随時紹介する。							

科 目 名		内 訳	開講時期	対象学年	単 位	時 間	担当教員
理学療法評価学Ⅱ		講義	後期	PT1年	2単位	60時間	山崎康幸
教 育 目 標	【一般目標】 1. 正確な徒手筋力検査法を実施し、検査結果から得られる情報を正しく捉えることができる。 2. 基礎知識（筋の起始停止、支配神経等）と検査法の意義を積極的に学習し理解する。						
	【行動目標】 1. 筋力評価の意義、目的、代表的な測定方法を説明する。 2. 正確な徒手筋力検査方法（MMT）を習得するべく、積極的な姿勢で参加する。 3. 徒手筋力検査法（MMT）に必要な主動作筋を触診する。 4. 徒手筋力検査法（MMT）の各検査を正確に測定する。						
成績 評価 方法	実技試験50％ 筆記試験50％で判定する。なお、実技試験・筆記試験それぞれが6割に満たない場合、そのそれぞれの試験に対して再試験を行うものとする。						
回	内 容						担当者
1	【座学】徒手筋力テストの概要						山崎康幸
2							
3	【実技】頭部・頸部のMMT						
4							
5	【実技】体幹のMMT						
6							
7	【実技】頭部・頸部・体幹のMMTの確認						
8							
9	【実技】肩甲帯（肩甲骨）のMMT						
10							
11	【実技】肩関節のMMT						
12							
13	【実技】肘関節・手関節MMT						
14							
15	【実技】上肢のMMTの確認①						
16							
17	【実技】上肢のMMTの確認②						
18							
19	【実技】股関節のMMT						
20							
21	【実技】膝関節のMMT						
22							
23	【実技】足関節のMMT						
24							
25	【実技】下肢のMMTの確認①						
26							
27	【実技】下肢のMMTの確認②						
28							
29	【座学・実技】全体の復習、実技試験の対策						
30							
履修者へのコメント ※45時間以上の自己学習を要する。 ・通常実技の際は肌の露出しやすい半袖・短パン（スパッツ）、ジャージなどで臨むこと。 ・実技試験の際は、規定の服装で望むこと ピアス、アクセサリは不可。 ・起始停止支配神経運動方向は理学療法特論Ⅰの資料を活用すること。							
テキスト 新・徒手筋力検査法 原著 第10版 （協同医書出版社）							
参考書							

科 目 名		内 訳	開講時期	対象学年	単 位	時 間	担当教員
中枢神経疾患理学療法治療学Ⅰ		講義	通年	PT2年	2単位	60時間	北村達夫
教 育 目 標	【一般目標】 中枢神経障害は、理学療法の対象となる頻度が高い疾患である。その理学療法実施の前提となる中枢神経に関わる知識を整理するとともに、理学療法との基礎的な関係や意義を理解する。						
	【行動目標】 1. 神経系および中枢神経系の構造と機能を理解する。 2. 脳血管障害の特徴について理解する。 3. 脳血管障害のリスク管理が実施できる。 4. 脳血管障害に関わる基本的な評価が実施できる。 5. 脳血管障害の理学療法プログラムを立案・実施できる。						
成 績 評 価 方 法	筆記試験（中間試験を含む）、グループワーク、課題発表、提出物で総合的に判定する。						
回	内 容						担当者
1	オリエンテーション、中枢神経の栄養血管						北村達夫
2							
3	中枢神経系理学療法の基礎知識（１）						
4							
5	中枢神経系理学療法の基礎知識（２）						
6							
7	脳損傷の定義と病態						
8							
9	脳卒中に対する医学管理						
10							
11	脳血管障害後片麻痺患者に対する理学療法評価						
12							
13	脳血管障害後片麻痺患者に対する理学療法（運動療法）						
14							
15	脳血管障害後片麻痺患者に対する理学療法（運動学習）						
16							
17	脳血管障害後片麻痺患者に対する理学療法のリスク管理、予後予測						
18							
19	脳血管障害後片麻痺患者に対する病期別の理学療法						
20							
21	脳血管障害後片麻痺患者に対する基本動作訓練						
22							
23	脳血管障害後片麻痺患者に対する立位・歩行動作訓練						
24							
25	脳血管障害後片麻痺患者に対する課題指向型トレーニング						
26							
27	感覚機能障害に対する理学療法						
28							
29	高次脳機能障害に対する理学療法						
30							
履修者へのコメント ※45時間以上の自己学習を要する。 ・授業内で実技を行う際は、授業に相応しい身だしなみで臨むこと。 ・授業の進行具合により、授業内容および順序を変更することがある。							
テキスト ・標準理学療法学 神経理学療法学 第3版（医学書院） ・授業内でも資料配布予定							
参考書 ・必要に応じて提示する予定である。							

科 目 名		内 訳	開講時期	対象学年	単 位	時 間	担当教員
骨・関節疾患理学療法治療学		講義	前期	PT2年	2単位	60時間	山川貴久
教 育 目 標	【一般目標】 基本的な運動器疾患(骨・関節疾患)に関する基礎知識を習得する。その上で、各疾患に合わせた理学療法評価・治療概念の理解を深める。						
	【行動目標】 1. 各疾患の病態及び治癒過程を理解し、他者へ説明ができる。 2. 疾患情報や症状・状態から適切な評価項目を選択できる。 3. 運動器疾患における基本的な理学療法プログラムを実践できる。						
成 績 評 価 方 法	定期試験にて判定する。						
回	内 容						担当者
1	組織の再生・修復、骨折と脱臼						山川貴久
2							
3	大腿骨骨折(頸部骨折、転子部骨折など)						
4							
5	上肢骨折(上腕骨近位端骨折、橈骨遠位端骨折など)						
6							
7	下肢骨折(脛骨近位端骨折、膝蓋骨骨折など)						
8							
9	脊椎圧迫骨折						
10							
11	変形性股関節症						
12							
13	変形性膝関節症						
14							
15	変形性関節症の手術療法、術後対応						
16							
17	肩関節疾患(肩関節周囲炎、腱板断裂)						
18							
19	頸部疾患(頸椎症性脊髄症、頸椎症性神経根症、頸椎椎間板ヘルニアなど)						
20							
21	腰部疾患(腰椎椎間板ヘルニア、腰部脊柱管狭窄症、腰椎分離症など)						
22							
23	脊椎疾患の手術療法、術後対応						
24							
25	膝関節疾患(靱帯損傷、半月板損傷)						
26							
27	足関節疾患(足関節捻挫、アキレス腱断裂)						
28							
29	関節リウマチ						
30							
履修者へのコメント ※45時間以上の自己学習を要する。 ・授業内で実技を行う際は、授業に相応しい身だしなみで臨むこと。 ・授業の進行度合いによって、講義内容及び順序を変更することがある。							
テキスト Crosslink 理学療法学テキスト 運動器障害理学療法学 (メジカルビュー社)							
参考書 必要に応じて講義内で紹介する。							

科 目 名		内 訳	開講時期	対象学年	単 位	時 間	担当教員
運動学Ⅱ		講義・演習	前期	OT2年	2単位	60時間	桜井淳
教 育 目 標	【一般目標】 1. 運動と生体機能との関係について理解できる。 2. 姿勢制御の仕組み、歩行と走行についてその要素や相違点について理解できる。 3. 運動発達、運動学習についてその要素や特徴を理解できる。						
	【行動目標】 1. 運動と生体機能との関係について説明できる。 2. 姿勢制御の仕組み、歩行と走行についてその要素や相違点について説明できる。 3. 運動発達、運動学習についてその要素や特徴を説明できる。						
成績評価方法	①定期試験60点以上 ②授業内確認テスト ③レポート課題提出 ①～③により総合的に評価する。						
回	内容						担当者
1	運動器の機能①						桜井淳
2							
3	運動器の機能②						
4							
5	随意運動						
6							
7	呼吸						
8							
9	血液と循環						
10							
11	体温調整，腎臓と酸塩基平衡						
12							
13	体力と運動処方						
14							
15	栄養とエネルギー						
16							
17	姿勢制御・重心①						
18							
19	姿勢制御・重心②						
20							
21	歩行①						
22							
23	歩行②						
24							
25	歩行③						
26							
27	運動発達						
28							
29	運動学習						
30							
履修者へのコメント ※45時間以上の自己学習を要する。 ・主体は講義形式である。 ・授業の理解度・進行状況により、授業内容の変更する場合もあるため、注意すること。							
テキスト 基礎運動学 第6版補訂（医歯薬出版株式会社）							
参考書 特になし							

科 目 名		内 訳	開講時期	対象学年	単 位	時 間	担当教員
義肢装具学		講義	前期	0T2年	2単位	30時間	大場耕一
教 育 目 標	【一般目標】 1. 手の外傷等に関連する義肢・装具（スプリント）の基礎を理解する。 2. 実際の装具（スプリント）の製作課程を確認し、有用性や構造を理解する。 またこれらの装具などを必要とする対象者の障害を理解する。 【行動目標】講義全内容終了後には、学生は以下のことができるようになる。 1. 義肢・装具に関する適応の理解と有用性を説明できる。 2. 義肢装具士等との連携の必要性を理解する。 3. これらの知識に基づいて、臨床現場において治療応用できる。						
成 績 評 価 方 法	定期試験、提出物（制作したスプリント等）、受講状況等により総合的に判定する。						
回	内 容						担当者
1	オリエンテーション、手の外傷後の評価について						大場耕一
2	装具療法と手の外科領域の疾患（1）概論						
3	装具療法と手の外科領域の疾患（2）拘縮						
4	装具療法と手の外科領域の疾患（3）骨折						
5	装具療法と手の外科領域の疾患（4）末梢神経損傷						
6	装具療法と手の外科領域の疾患（5）腱損傷						
7	スプリントの実際（1） 装具の分類						
8	スプリントの実際（2） 疾患別スプリント						
9	スプリント製作の実際（1）カックアップスプリント：演習						
10	スプリント製作の実際（2）サムスパイカスプリント：演習						
11	スプリントの実際（3）適応と目的：演習						
12	義肢について（1）：演習						
13	義肢について（2）：演習						
14	講義全体の総括（1）						
15	講義全体の総括（2）および試験対策						
履修者へのコメント ※67.5時間以上の自己学習を要する。 講義、もしくは演習の進捗に応じて、変更点などは適宜、講義中に説明します。 単に知識を増やす事だけではなく、製作の意図・意味合いをイメージしてください。							
テキスト 「手のスプリントのすべて 第4版」 矢崎 潔 著 （三輪書店）							
参考書 「作業療法技術学9 義肢装具学」 古川 宏 編 （協同医書出版社）							

科 目 名		内 訳	開講時期	対象学年	単 位	時 間	担当教員
日常生活動作援助論		講義	前期	OT2年	2単位	30時間	中山奈保子
教 育 目 標	【一般目標】 ADLの概念および生活機能との関連を把握し代表的な評価・介入の原則(ポイント)を理解する。						
	【行動目標】 ①ADL評価・支援に関連する基本用語を理解・説明できる。②ADL各項目の特徴を説明できる。 ③ADL各項目の一般的な構成要素(工程)を記述できる。④ADL各項目の一般的な構成要素(工程)ごとに、関連する主要な心身機能、環境を列挙できる。⑤ADL各項目の評価ポイントを説明できる。 ⑥ADL各項目の介入ポイント(注意点)を説明できる。⑦客観的ADL評価指標を列挙し、その活用方法を説明できる。						
成績 評価 方法	講義中に提出する課題および学習者の行動目標達成度を評価するルーブリック(基準表)を用い判定する。						
回	内 容						担当者
1	Introduction / 基本用語と定義・ADLの領域						中山奈保子
2	ADLの評価に必要な知識① 運動・動作・活動・行為						
3	ADLの評価に必要な知識②						
4	食事動作の特徴と評価のポイント・介入原則と支援の実際						
5	排泄動作の特徴と評価のポイント・介入原則と支援の実際						
6	更衣動作の特徴と評価のポイント・介入原則と支援の実際						
7	入浴動作の特徴と評価のポイント・介入原則と支援の実際						
8	身辺処理動作・屋外活動の特徴と評価のポイント・介入原則と支援						
9	調理の特徴と評価のポイント・介入原則と支援の実際						
10	学業活動の特徴と評価のポイント・介入原則と支援の実際						
11	社会活動の特徴と評価のポイント・介入原則と支援の実際						
12	客観的評価指標のまとめ：評価の実際(BI・FIMを中心に)①						
13	客観的評価指標のまとめ：評価の実際(BI・FIMを中心に)②						
14	客観的評価指標のまとめ：評価の実際(BI・FIMを中心に)③						
15	客観的評価指標のまとめ：評価の実際(BI・FIMを中心に)④/総括						
履修者へのコメント ※67.5時間以上の自己学習を要する。 ・臨床実習において意欲的・能動的に学ぶための準備として課題に取り組むこと。 ・やむを得ず講義を欠席する場合は、事前にクラス担任または担当講師へ申し出るか、講義後すみやかにクラス担任へ相談すること。							
テキスト 指定しない(必要に応じ講義資料として配信する)							
参考書 必要に応じ講義資料として配信する。							

科 目 名		内 訳	開講時期	対象学年	単 位	時 間	担当教員
生活環境論		講義	前期	OT2年	2単位	30時間	柘植哲洋
教 育 目 標	【一般目標】 1. 豊かな生活を営むための代償的な資源（福祉機器等）について理解できる。 2. 住環境に対するアプローチ方法を学び、住宅改修の提案をするために必要な知識を習得する。 3. 医療や介護の分野における様々な社会制度について理解することができる。						
	【行動目標】 1. 自助具・福祉機器等の種類や特徴、用途等を自ら調べ、述べるができる。 2. クライアントのニーズに合わせた住宅改修や社会資源の利用ができるように、教科書や資料等を自ら情報収集し、提案することができる。 3. 各制度の特徴や違いを述べるができる。また、医療保険・介護保険それぞれで利用可能なサービス等について把握し、特徴を説明できる。						
成績 評価 方法	定期試験、グループワークでのプレゼン内容、実技での技能獲得状況により総合的に判断する。						
回	内 容						担当者
1	生活環境学の概論。住宅環境とは？、情報収集・評価(面接含む)のスキル・他職種連携						柘植哲洋
2	福祉機器（電動ベッドなど）、住宅改修：手すり、段差解消、転倒予防						
3	制度の理解：介護保険制度、障害者総合支援法、補装具費支給制度						
4	生活構造・地域環境・住環境に対する評価、家屋評価のポイント						
5	家屋評価・住宅改修のポイント、間取り図の描き方について①						
6	間取り図の描き方について②、住宅改修案について						
7	住宅改修案：グループワーク課題の提示、ディスカッション						
8	住宅改修案：グループワーク課題の発表						
9	疾患別住環境整備の考え方						
10	福祉住環境整備の基本的なポイント、部屋別・場所別のポイント						
11	福祉用具・ADLで用いる自助具について・自助具作製						
12	疾患別の福祉用具導入例（CVA, RAなど）等						
13	ポジショニングについて						
14	シーティングについて（車いすの選定・調整）						
15	杖・歩行器の選定・調整、災害リハビリテーションについて、総括						
履修者へのコメント ※67.5時間以上の自己学習を要する。 授業形式は講義・グループワーク・実技とする。その都度適した形式にて授業を進める。							
テキスト 標準作業療法学 地域作業療法学 第4版（医学書院） その他、適宜配布資料あり。							
参考書 標準作業療法学 日常生活活動・社会生活行為学（医学書院）の一部も参考にする予定です。							

科 目 名		内 訳	開講時期	対象学年	単 位	時 間	担当教員
作業療法運営管理		講義	後期	OT3年	2単位	30時間	熊谷淳平
教 育 目 標	【一般目標】 各分野における作業療法を運営するための知識を理解する。 【行動目標】 1. 作業療法の現状を理解する。 2. 作業療法が求められる分野を説明できる。 3. 作業療法部門を管理・運営するための知識を理解できる。						
成 績 評 価 方 法	講義中に行うグループワークでの提出課題の内容により総合的に評価する。						
回	内 容						担当者
1	作業療法の歴史と現状（日本と世界の作業療法）						熊谷淳平
2	作業療法と生命・医療倫理（プロフェッショナリズム）						
3	作業療法と生命・医療倫理（ノーマライゼーション）						
4	作業療法と生命・医療倫理（インフォームドコンセントと個人情報保護）						
5	作業療法と関連法規（PT・OT法、医療・介護保険）						
6	作業療法と臨床疫学						
7	作業療法と医療統計						
8	エビデンスの基づく作業療法						
9	作業療法における健康維持と健康増進						
10	作業療法における予防医学（疾病、再発、障害予防）						
11	作業療法における管理・運営						
12	作業療法における管理・運営（安全・情報管理）						
13	作業療法の分類（仕事・生産的活動）						
14	作業療法の分類（遊び・余暇活動）						
15	総括①						
履修者へのコメント ※67.5時間以上の自己学習を要する。 特になし							
テキスト ・ なし ・ 必要に応じて参考文献を紹介する。							
参考書 必要に応じて紹介する。							